Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

定期試験における リーディング・テスト

根岸雅史　Negishi Masashi
（東京外国語大学）

1．定期試験におけるリーディング・テストの問題

定期試験のリーディング・テストに，既習のテキストを用いていないだろうか。既習のテキストでは，そのテキストを読んで理解する力が本当にあるのかはわからない。事実，もし入学試験にどこかの教科書のテキストがそのまま出ていたとしたら，社会的な大問題となるはずだ。

それにもかかわらず，まだかなりの教師が既習のテキストをテストに用いているのも事実だ。このことは，テストが生徒のことを知る手段でなく，生徒に勉強をさせる手段になっていることを物語っている。つまり，授業でやったテキストをテストに出すということは，授業をよく聞いておきなさいというメッセージであり，試験勉強では教科書の内容そのものをよく復習しておきなさいというメッセージとなる。このメッセージ自体は悪いことではないが，問題は，このような学習を通して，学習到達目標が真に達成されたかどうかを見ていないことだ。これは，日頃のリーディング指導の目標が，教科書のテキストそのものの理解になっていて，その教科書のテキストを読む活動を通じて，どのようなリーディング力をつけるのか，イメージが明確でないことから来ているとも言える。

2．教科書とテストのテキストをどうつなぐ？

では，教科書のテキストを用いないとした場合は，どのようなテキストをテストに用いているのであろうか。定期試験を調べてみると，大きく４つのタイプに分けられる。

タイプ０（ゼロ）：つながりなし

教科書とは何のつながりもないタイプ。英検の過去問や入試問題などから取ってくることが多い。このタイプは，リスニング・テストではよく見かけるが，リーティング・テストでも散見される。しかし，これでは，いわゆる「実力テスト」になってしまい，学習の振り返りにはなりにくい。

タイプ１：言語材料でつなぐ

教科書に出てきた言語材料でつないでいるタイプ。ただし，言語材料といってもその多くは文法である。たとえば，教科書のリーディング・テキストが現在完了形の出てくるテキストであれば，テストも現在完了形を含むテキストとなっているというものだ。だが，必ずしもトピックやテキスト・タイプが関連しているわけではない。教科書はメール文で，テストは会話文となっているといったこともある。

リーディング・テストで，この方式が妥当性を持ちうるのは，リーディングの指導において，特定の読み方が意識されていない場合であろう。目標となる言語材料を含むテキストを読んで理解できるかということだけが問題となる。

タイプ２：トピックでつなぐ

教科書のテキストのトピックでつなぐタイプ。教科書のリーディング・テキストがスポーツであれば，テストもスポーツであるとか，教科書が食べ物であれば，テストも食べ物というものである。

ただ，トピックでつないでいるといっても，教科書が野球選手の話題で，テストがサッカー選手の話題であるというようにスポーツというレベルでつないでいる場合と，教科書が野球選手の野茂英雄の話題で，テストが同じく野球選手のイチローの話題であるというように個人の選手というレベルでつなぐ場合があり，その関連性のレベルはさまざまである。タイプ２の場合は，どの程度トピックを近づける

かということが問題になる。

これに伴う問題としては，トピックで関連づけたといっても，語彙的にはかなり異なったテキストとなるということがある。たとえば，野球とサッカーでは，テキストに出てくる単語や表現もかなり異なったものになる可能性がある。

タイプ３：テキスト・タイプでつなぐ

テストと教科書をテキスト・タイプでつなぐこともある。これは，教科書のリーディング・テキストが物語文であれば, テストも別の物語文であるとか, 教科書がメール文であれば，テストもメール文であるというようなものだ。

タイプ３の場合は，同じテキスト・タイプを用いるといっても，どの程度類似したものを用いるかという問題がある。物語文という同じテキスト・タイプであっても，その構成や表現技法は大きく異なることもある。そこで，なるべく構成や表現技法の近いものを作成したり, 探そうとするかもしれない。しかし，このアプローチで類似性を高めていくと，トピックが違うだけで，展開が教科書のテキストとほとんど変わらないテキストをテストでも用いることになったりする。こうなると，教科書のテキストと異なるとはいえ，ある意味，読まずに筋がわかってしまうので注意が必要だ。

３．解決策はあるか？

もちろんこれら３つのタイプは，排他的ではないので，言語材料もトピックもテキスト・タイプもすべてつなげることができるだろう。たとえば，*NEW CROWN Book 2* Lesson 2 でピーターラビットの物語を読むことになっている。言語材料（文法）としては，「過去形（be 動詞）」「過去進行形・接続詞 when」となっているので，テストではこれらを含んだテキストで, テキスト･タイプは「物語文」を選択するということもできる。

さらに, 動物というトピックでつなぐのであれば, 「不思議の国のアリス」や「イソップ寓話」なども使えるかもしれない。ただし，実際にテストのテキストとして使う際には，指導目標に入っていた言語材料や時間の流れを示す指標などがテキストに含まれているかのチェックは必要だ。

しかしながら，教科書と異なるテキストを用いていても，その物語自体が生徒に既知の物語である可能性がある。また，何かの説明文を扱っているテキストが教科書に出ていて，テストでは別の何かの説明文を用いる場合なども，その別のものが生徒に既知である場合もあるので，注意が必要だ。

４．テキスト以外の問題

実は，教科書とテストのテキストだけが関連していても，リーディング・テストの問題の本質的解決にはならない。テキストとその読み方は，セットで考える必要がある。

定期試験のリーディング・テストの分析をしてみると，問うている理解の質が大きく偏っていることに気づく。リーディング・テストの解答に当たり，テキストのどの部分をどう読むことで正解を得るようになっているかを調べてみると，そのテストがどのようなリーディング･スキルを測っているのかがわかるので，一度自分のテストで確認してみるといいだろう。定期試験の多くは，１文またはせいぜい２文レベルの「文字通りの理解（literal comprehension）」を問うものになっている。

リーディング・テストの問題のあり方は，指導目標とする読み方と関わってくる。しかしながら，指導目標が，「物語を読んで，概要をとらえる」や「説明文を読んで，要点をとらえる」となっていても，文章全体を読んで初めて解答可能となるような問題というのは，なかなか見かけない。

概要を問う問題を作るのであれば，「この文章の概要を表している選択肢を選びなさい」や「この文章を～語程度でまとめなさい」というような真正面から概要を問う問題を一度作ってみるとよい。前者では，テキストの概要が書かれた正解の選択肢を書かなければならないし，後者のような open-ended な問いでは，そのテキストの概要として含めるべきポイントごとに採点していく方法が考えられる。また，パラグラフ単位の並べ換え問題なども，大きな単位での文章の理解が関わってくるだろう。

テキストとテスト内容が連動して初めて，テストから指導を振り返ることができるのである。